

## MR（麻しん及び風しん）の予防接種を受けるに当たっての説明

### ◆麻しん（はしか）・風しん

#### 病気の説明

##### （ア）麻しん（はしか）

麻しんウイルスの感染によって起こります。感染力が強く、飛沫・接触だけではなく空気感染もあり、予防接種を受けずにいると、多くの人がかかり、流行する可能性があります。典型的なはしかは、高熱、せき、鼻汁、眼球結膜の充血、めやに、発疹を主症状とします。最初3～4日間は38℃前後の熱で、一時おさまりかけたかと思うと、また39～40℃の高熱と発疹がでます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発疹も消失します。しばらく色素沈着が残ります。

主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。患者100人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約1～6人に合併します。脳炎は約1,000人に1～2人の割合で発生がみられます。また、亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という慢性に経過する脳炎は、はしか患者約10万例に1～2例発生します。はしかは、医療が発展した先進国であっても、かかった人の1,000人に1人が死亡するととも重症の病気です。日本でも平成12(2000)年前後の流行では年間約20～30人が死亡していました。世界各地で、はしかは再び増加傾向にあり、途上国を中心に多くの小児がはしかで命を落としています。

##### （イ）風しん

風しんウイルスの飛沫感染によって起こります。潜伏期間は2～3週間です。典型的な風しんは、軽いかぜ症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか、眼球結膜の充血もみられます。年長児や成人では関節炎の頻度が高く、予後は一般的に良好ですが、血小板減少性紫斑病や脳炎の合併を認めることがあり、まれに溶血性貧血もみられます。感染症発生動向調査によれば、平成30(2018)年～令和元(2019)年の風しんの流行(累計5,239人)で、血小板減少性紫斑病が21人、脳炎が2人報告されました。大人になってからかかると重症になります。妊婦が妊娠20週頃までに、風しんウイルスに感染すると、先天性風しん症候群と呼ばれる先天性の心臓病、白内障、聴力障害、発育発達遅滞などの障害を持った児が生まれる可能性が非常に高くなります。

#### MR（麻しん・風しん）二種混合ワクチン

麻しんウイルス及び風しんウイルスを弱毒化してつくった生ワクチンです。

第1期の接種は1歳から2歳未満に1回行い、第2期の接種は、小学校就学前の1年間、いわゆる幼稚園等の年長児が対象として1回行います。なお、ガンマグロブリン製剤の注射を受けたことがあるお子さまについての接種時期については、かかりつけ医と相談してください。

#### ワクチンの副反応

副反応の主なものは、発熱と発疹です。なお、これらの症状は接種後13日以内(特に7～10日)に多くみられます。なお、接種直後から数日中に過敏症状と考えられる発熱、発疹、そう痒などがみられることがありますが、1～3日で治ります。(予防接種に関するQ&A集)。これまでの麻しんワクチン、風しんワクチンの副反応データから、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、けいれんなどの副反応が、まれに生じる可能性もあります。

#### 予防接種を受けるときの注意

○予防接種は体調のよいときに受けるのが原則です。

○予防接種の実施期間は、幅広く定められていますが、標準的な接種期間に接種されることをお勧めします。

(決められた年齢を過ぎると公費で接種を受けることができません。)

○気になることがあれば、あらかじめかかりつけの医師や市保健センターにご相談ください。

○お子様の普段の健康状態の確認をすることのできる保護者の方が同伴してください。

#### 予防接種当日の注意

- ① 当日は、朝からお子様の状態をよく観察し、普段と変わったところのないことを確認するようにしましょう。予防接種を受ける予定であっても、体調が悪く思ったら、かかりつけ医に相談のうえ、接種をするかどうかを判断しましょう。
- ② 受ける予定の予防接種について「予防接種と子どもの健康」をよく読んで、必要性や副反応についてよく理解しましょう。分からないことは接種を受ける前に接種医に質問しましょう。

- ③ 母子健康手帳は必ず持っていきましょう。
  - ④ 予診票は、接種する医師への大切な情報です。責任をもって記入するようにしましょう。
  - ⑤ 予防接種を受けるお子様の日ごろの健康状態をよく知っている保護者の方が連れていきましょう。
- なお、予防接種の効果や副反応などについて理解したうえで、接種に同意したときに限り、接種が行われます。

### 予防接種を受けることができない場合

- ① 明らかに発熱（通常37.5℃以上）をしている
- ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らか  
急性で重症な病気にかかっているお子様は、その後の病気の変化もわからないことから、その日は接種を受けないのが原則です。
- ③ その日に受ける予防接種の接種液に含まれる成分で、アナフィラキシーを起こしたことがあることが明らか  
※「アナフィラキシー」というのは、通常接種後約30分以内に起こるひどいアレルギー反応のことで、汗がたっくさん出る、顔が急に腫れる、全身にひどいじんましんが出るほか、はきけ、嘔吐、声が出にくい、息が苦しいなどの症状やショック状態になるような激しい全身反応のことで、
- ④ 風しん、水痘（水ぼうそう）、麻しん（はしか）、おたふくかぜ、手足口病、ヘルパンギーナにかかり、治療後1ヶ月を経過しない、及び突発性発疹にかかり治療後2週間を経過しない。  
(家族の中で上記病気にかかっている人があれば申し出てください。)
- ⑤ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

### 予防接種を受ける際に注意を要するお子さま

以下に該当するお子様がいらっしゃると思われる保護者は、かかりつけの医師がいる場合には、必ず前もってお子様を診てもらい、予防接種を受けてよいかどうかを判断してもらいましょう。受ける場合には、かかりつけ医師のところで接種を受けるか、あるいは診断書又は意見書をもってから予防接種を受けるようにしてください。

- ① 心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気や発育障害などで治療を受けている
- ② 予防接種で、接種後2日以内に発熱の見られたお子さま及び発疹、じんましんなどのアレルギーと思われる異常が見られた
- ③ 過去にけいれん（ひきつけ）を起こしたことがある
- ④ 過去に免疫不全の診断がなされている及び近親者に先天性免疫不全症の人がいる
- ⑤ ワクチンにはその製造過程における培養に使う卵の成分、抗生物質、安定剤などが入っているものがあるので、これらにアレルギーがあるといわれたことのある
- ⑥ 家族の中や遊び友達、クラスメイトの間に麻しん（はしか）、風しん、おたふくかぜ、水痘（水ぼうそう）などの病気が流行している時で、予防接種を受ける本人がその病気にかかったことがない。

### 予防接種を受けた後の一般的注意事項

- ① 予防接種を受けた後30分間程度は、医療機関（施設）でお子さまの様子を観察するか、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。急な副反応が、この間に起こることがあります。
- ② 接種後、1週間は副反応の出現に注意しましょう。
- ③ 注射部位は清潔に保ちましょう。入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。
- ④ 接種当日は、はげしい運動は避けましょう。
- ⑤ 接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合は、速やかに医師の診察を受けましょう。

※ワクチンの種類によっても異なりますが、発熱、接種局所の発赤・腫脹（はれ）、硬結（しこり）、発疹などが比較的高い頻度（数%から数十%）で認められます。通常、数日以内に自然に治るので心配する必要はありません。

### 重い副反応並びに予防接種健康被害救済制度

ワクチンの種類によっては、極めてまれ（百万から数百万人に1人程度）に脳炎や神経障害などの重い副反応が生じ、生活に支障が出るような障害を残すこともあります。このような場合に厚生労働大臣が予防接種法に基づく定期の予防接種によるものと認定したときは、予防接種法に基づく健康被害救済の給付対象となります。給付申請の必要が生じた場合には、川西市保健センターへご相談ください。

制度の詳細は厚生労働省ホームページへ →



川西市保健センター

☎ 072-758-4721